

『殷墟卜辭綜類』の部首内排列の分析

鈴木 敦^{†1} 鈴木 俊哉^{†2}

2003年から2012年にかけて作業されていたISO/IEC 10646への古漢字追加提案作業の反省点の一つとして、甲骨文字の同定および排列方法が詳細に定義されていないため、作業者が作業中の文字集合を十分に見渡すことができず、排列順序の修正や重複した文字の追加と削除が繰り返され、提案する文字集合が全く安定しないという障害があった。筆者らは、この障害は強引な説文解字への対応づけが原因であると考え、島邦男『殷墟卜辭綜類』や姚孝隆『殷墟甲骨刻辭類纂』に見られる甲骨文字字形を直接扱う排列手法を提案していた。筆者らは、これらの文字表の見出し字の安定性を検討するために対応表を作成しているが、非専門家にとっては、これらの研究書の検字表の効率的な利用方法が十分周知されていないため、非専門家の支援を受ける材料としてはさらに改善の余地があると考えられる。そこで、本報告では、これらの研究書の部首内の排列に見られる規則性について報告したい。

Analysis of Intra-Radical Collation Rule of “Inkyo Bokuji Sourui”

ATSUSHI SUZUKI^{†1} suzuki toshiya^{†2}

From 2003 to 2012, Old Hanzi Expert Group under ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG was working to make a draft character set for Old Hanzi to be proposed in ISO/IEC 10646. The project could not finish successfully. The remarkable difficulty that the ordering of Oracle Bone character to Seal script in Shuowen Jiezi had many ambiguities, it caused repeated correction of the order of the characters (the appropriate Shuowen radical must be determined by the semantics of the character, but current study of Oracle Bone script is not so matured to give the stable conclusion). Also the long list of the sampled glyphs made it difficult to overview of the character set for the project members; it caused much duplication in the draft charset. Japanese experts proposed to use the collation methods in “Inkyo Bokuji Sourui” (Kunio Shima, 1969) or “Yinxu Jiagu Keci Leizuan” (Yao Xiao Sui, 1989) dealing with Oracle Bone glyph shape directly. The authors are now making a mapping table between the indexing glyphs of these 2 collections to discuss the stability of the character identity. However, the intra-radical ordering of these books is supposed to be still hard for the non-expert to overview, because there is no description. In this report, we analyze the structure.

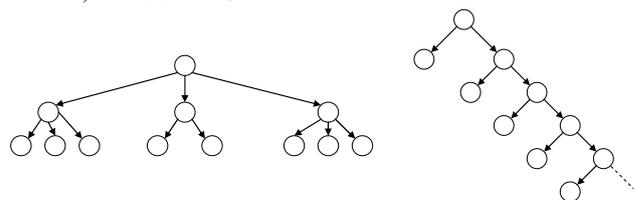
1. はじめに

2003年から2012年にかけて、国際標準文字符号であるISO/IEC 10646³⁾に古漢字(甲骨文、金文、小篆)を追加するため、ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRGの下で古漢字アドホックグループは甲骨文字の整理作業を行っていた。しかし、甲骨文字を説文解字の小篆字形に対応づけて排列するという方針で作業したために、甲骨文字をどの小篆字形に対応づけるか、また、データベースをどのように概観して「まだ採録されていない」と判断するかといった方法論が確立せず、小篆字形との対応関係の修正、および重複データの修正に作業時間を要した。結果として、約10年の間に草案としての文字集合を整理することができず、アドホックグループを解散することとなった¹⁾⁻²⁾。

日本の専門家は、『殷墟卜辭綜類』⁴⁾(以下、『綜類』)や『殷墟甲骨刻辭類纂』⁵⁾(以下、『類纂』)に見られる、甲骨文字を小篆字形に対応づけず、甲骨文字字形を直接排列する手法により甲骨文字を整理するべきだという提案を行ってきた⁶⁾⁻¹⁶⁾。筆者らは、『綜類』および『類纂』の見出し字の対応づけ作業であれば、古漢字アドホックグループが行ったような、拓本の模写から開始するような手法に比べて、作業量も少なく、高度な専門性を持たない作業者であっても6-7割程度の対応づけが可能であることを予備調査で示した¹⁸⁾。

1.1 検字表の分類方式とその偏り

小規模な見出し字の突合せ作業においても、非専門家にとって『綜類』および『類纂』の検字表は必ずしも一覧性が高いものではなく、それに起因する作業ミス(突合せ可能な文字があるにもかかわらず見落としが発生する事例や、より適切な文字を対応させずに別の文字を対応させてしまうなど)も見られた。



とすることはできないが、枝の長さに偏りがあることが障害となることは、集中力の持続時間に限界のある人間にもある程度共通した問題だと言えよう。一個の文字を検索するにあたり、どの程度の手間がかかるか(何回ページをめくり、何個の文字を注視しなければならないか)ということが推定できれば、たとえば集中力持続時間の上限から「結果を信頼してよい作業量」を予測できるからである。しかし、ひるがえって未解読文字や文字同定基準が明らかでない文字をグループ化する作業を考えた場合、グループのサイズが「検索性の高い木構造」に適した均等な分布になるとは考えにくく、むしろ単語出現頻度における Zipf 則のような偏りが出ると考えるのが自然である²¹⁾。

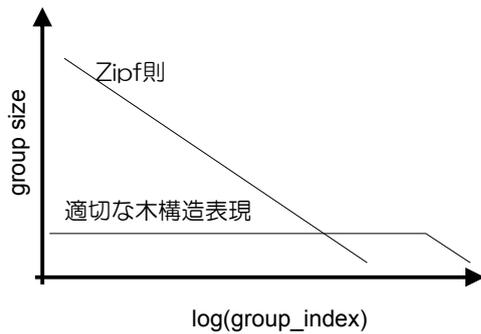


図 2: 木構造表現に適したグループ化と Zipf 則の違い

実際、ISO/IEC 10646 の統合漢字について、各康熙字典部首と、そこに排される漢字数の関係を調べると、下図のような偏りが見られる。康熙字典においては、部首内の漢字を画数によって排列し、さらに同一画数の漢字を(排した康熙字典部首を除いた)第一画の形状で分類することにより、同一部首・同一画種の漢字が大量に並んだ場合の検索性を改善している。また、部首自体も画数によって排列することで検索性を高めている(図 3)。

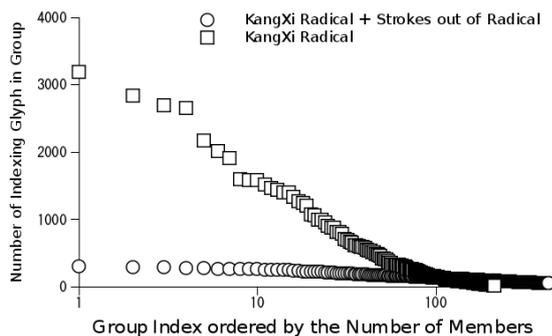


図 3: Unicode 7.0 収録漢字に対する部首のみの分類と、部首内画数分類を加えた場合の頻度分布

注意する必要があるのは、部首分類と画数分類というほとんど相関性がない分類を組み合わせることにより、Zipf 則には従うものの、サブグループ数を増やし、一つのサブグループに格納される文字数を減らしていることである。ごく初期の漢字の部首体系である『説文解字』の部首数は 540 個であり、214 個の康熙字典部首の倍以上あるが、部首と画数の組み合わせでのサブグループ数(図 3 に示す例では

4177 グループであった)よりは遥かに小さい。また説文部首では特定のグループに Zipf 則よりも高い偏差が見られる。

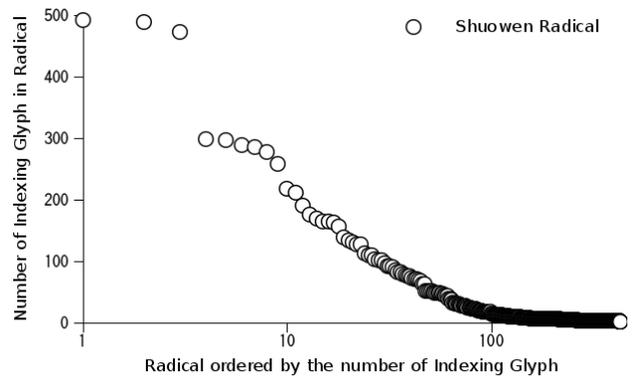


図 4: 説文解字の部首分類とその偏差

甲骨文字においては画数や第一画形状のような安定した指標がないため、『綜類』でも『類纂』でも「部首はどのように排列しているか」「同一部首内でどのように甲骨文字を排列しているか」を明確にしていない。部首だけで排列した場合の分布図を下図に示したが、見出し字数が少ない部首に関しては Zipf 則的な傾向が見られるが、見出し字数が多い部首においては Zipf 則よりも偏りが強いおそれがある。また、より新しい『類纂』でも、同様の偏りが見られるだけでなく、さらに偏りの傾向が強くなっていることがうかがわれる。ただし、『綜類』の部首数は 158 個、『類纂』の部首数は 149 個で説文部首(540 個)、康熙字典部首(212 個)より少ないが、『綜類』『類纂』とも、説文における偏差ほど強くはないことには注意すべきである。

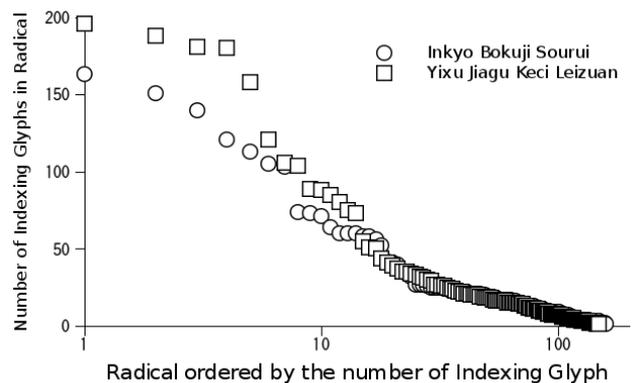


図 5: 『綜類』『類纂』の部首分類とその偏差

『類纂』以降に同様の整理手法をとった網羅的な研究書は出版されていないが、『新編甲骨文字形表』²²⁾『甲骨文字編』²³⁾のように、『類纂』にない見出し字を追加して新規性を主張する方向性が目立つ状況では、この偏りを解決する方向での分類方法の見直しが行われるとは期待したいし、また、仮に分類方法が提案されても、それに基づいた網羅的な整理を行うには専門家的人的資源が足りないであろう。従って、既に存在する網羅的な研究に見られる排列手法を

解析し、康熙字典における部首内画数排列のような役割を持たせることが現実的な解決であろう。

1.2 本稿の問題意識

既に述べたように、甲骨文字に通じた研究者であれば、『綜類』『類纂』の研究書の見出し字の排列を言語化しないまでも「どの部分からどの部分までには出現を期待できないか」「現れるとすればどの部分が候補となるか」を推定できるので、同一部首内の文字全てに対して集中力を維持して走査する必要は無いが、非専門家はそのような推定ができず、部首に対する見出し字数の偏りがそのまま検索の困難につながる。

同様の問題点は説文解字の部首内排列にも存在するが、説文解字の利用者は古漢字研究者から篆刻家・書道家まで広い範囲におよぶため、「説文解字の部首内排列に見える著者の考え方」の研究や、あるいは排列法がわからないまでもこれを暗記しようという動機づけは十分に有効である。ISO での甲骨文字標準化作業において、日本の専門家は、説文解字への対応づけを通じた間接的な整理ではなく、甲骨文字を直接取り扱った文字同定および排列処理を主張したが、説文解字への対応づけによって多大な計画の遅延が引き起こされていたにも関わらず、このような状況下で「各文字体系に適した同定・排列方法を取るべきだ」という主張は合意を形成することができなかった。この原因の一つは、やはり『綜類』『類纂』の排列方法の使い方が十分に理解されておらず、非専門家を含む符号化甲骨文字の利用者が許容できるものは説文排列が限界という意識があったものと思われる。

この反省を踏まえれば、非専門家にとっては必ずしも自明でない『綜類』『類纂』の排列方法の構造を明らかにすることは「専門家と非専門家が妥協できる甲骨文字の標準符号」を開発する準備として必要なものであろう。本稿ではこのような問題意識に基づき、『綜類』の「人部」の構造について述べる。

2. 資料と分析手法

以下に、本稿で分析した資料とその特性について整理する。既に述べたように、『類纂』は『綜類』以降の研究であり、また、中国や台湾において多数の派生研究を産んでいるものの、その分類方式は「分類の偏り」を観点としてみ

た場合、必ずしも『綜類』より改善されているとは言えないものがあった(たとえば最も見出し字数が多い人部について、『綜類』は見出し字 163 個に対し、『類纂』は 196 個を掲出する)。そこで、本稿ではより見通しがよいと思われる『綜類』について分析する。

2.1 『綜類』目次と検字表および「綜類番号」

『綜類』には、見出し字を本文掲出順に抜き出した「目次」と、連想し得る全ての部首に対して重複した掲出を行った「検字索引」がある。例えるならば、「記」を言部と己部の両方で掲出するような方針で作られている。特に非専門家の検索負荷を評価するには、「目次」よりも「検字索引」について評価するべきであるが、しかしながら、この「検字索引」はおそらく事後的に整理されたために以下のような問題点があることがわかっている。

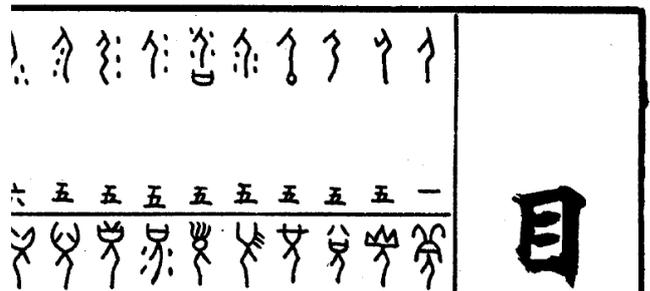


図 6: 『綜類』目次(冒頭部分)

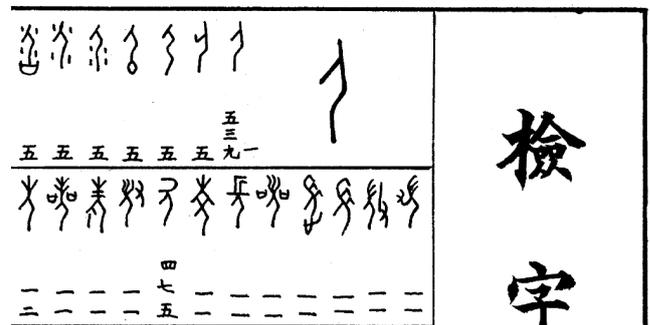


図 7: 『綜類』検字索引(冒頭部分)

- 本文の見出し字(「目次」にひかれるもの)は著者があがる程度抽象化した字形であるのに対し、「検字索引」はより具体的な字形のまま模写したと思われる。分類粒度が異なるため、単純に「検字索引」の字形を整理しても、本文の見出し数と合致しない。

人部	丁部	人部	人部	人部	足部	人部	人部	人部	木部
(a)		(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)

図 8: 綜類検字索引における重複および類型見出し字の字形差¹⁸⁾

- 重複掲出をするはずと思われるものが、模写ミスによって異なる字形で掲出されている場合がある。
 - 図 5(a)は人部と丁部に同じ字形を掲出しようとしたが若干の字形差が出てしまっている。
 - 人部に図 5(b)(c)のような別字が掲出されていることからすれば、この字形差を著者は区別していたと考えられるが、(d)(e)のように同じ字形を掲出すべきところに字形差が出ており、ここでは区別が曖昧であったと言える。(f)(g)では区別していたものが(h)(i)のように曖昧になっている例も同様である。
 - 本文に掲出されていない字形が検字表に現れる例がある。
- 本文見出し字に通し番号が振られていないため、同一頁をさしている類型字を著者が同一視していたのかどうか判断がつかない。
- 本文ページ番号に印刷時の欠けがあり、検字表だけを処理すると幽霊文字が発生する恐れがある。

これらの問題点を十分に修正したものが未だ無いため、本稿では、現在、研究者の間で「綜類番号」により指定される字形について調査した。この典拠は松丸道雄・高嶋謙一による『甲骨文字字積綜覧』(以下、『綜覧』)の付録に整理されたリストである。図 9 に示すように『綜覧』の本文は、掲出例をまとめたグループ(文字域)ごとに見出し字が掲出されるが、グループによっては複数の見出し字を掲出している。『綜覧』の「目次」はこれらを区切り無く列挙するが、この方式では本文中で著者が文字域をいくつ想定したのか判り難いため、『綜覧』の綜類番号は文字域ごとに番号をふり、各グループの最初の見出し字を用いている。

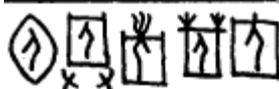
『綜覧』目次	『綜覧』附録
	-060  12
	-061  12
	-062  12
	-063  13
	-064  13
	-065  13
	-066  13

図 9: 『綜覧』目次および本文と、『綜覧』の定義する「綜類番号」の関係

2.2 分析手法

本稿では、もっとも見出し字数が多い人部に対して、非専門家が機械的に判断可能な判断基準を複数とり、この組み合わせにより 163 個の見出し字がどのようなブロックに

分かれているかを検討した。判断基準は以下の通りである。

- 図形要素の追加がなく、部首図形の単なる変形であるかどうか
- 追加された図形要素に単体で意味をもつものが含まれるか
 - たとえば点の個数の違いで見出し字を分けてある場合は是となるが、「水」を意味する可能性がある波線では否となる
- 追加された図形要素は単体で意味を持たないものが含まれるか
 - 複数の図形要素が追加されている場合、前項と本項は独立な評価である
- 部首部分に密着した図形要素がある
- 部首部分に偏旁として付加された図形要素がある
- 『綜覧』が掲出する類例が 10 例以上あるかどうか
- 『甲骨文編』²⁴⁾が例示しているか
 - 本文・合文で例示しているか
 - 附録で例示しているか

3. 分析結果

具体的な分析結果は附録に示し、本章では分析結果を述べる。

3.1 部首内の大域的な構造

まず、部首内の大域的な構造として

- A) 部首字、および、部首字を為す筆画を変形したもの
 - B) 部首字に図形部品が付加されているもの
- であることが見える。さらに、B)はある程度のサブグループに分かれており、出現例数が多いものを筆頭として何らかの類似性を見出したものをグループ化していることが伺える。概念としては、下図のように解釈できると思われる。

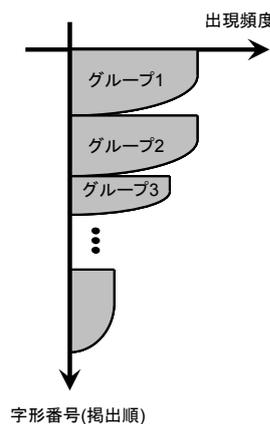


図 10: 分析結果から推定される掲出順序の構造

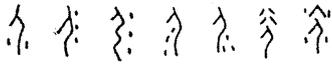
サブグループの排列順序に関しては、付加されている図形要素の性質(単体で意味を成す要素を組み合わせるか、そうでないか)、要素が密着しているか、あるいは、『甲骨文編』本文に収録されるなどして広く知られているか、などを検討したが、明確な排列の規則性を見つけることができ

なかった。

3.2 字形類似性によると思われるサブグループ

甲骨文字の研究に習熟していなくても容易に見分けることができるのは、

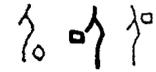
005 - 012: 点または短い線が付加されている字形群



016 - 020: 人型の腹部が膨らんでいる表現をとる字形群



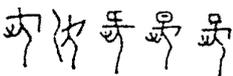
027 - 029: 人型に対し矩形または菱形を付加した字形群



062 - 064: 人型を囲む構造を持つ字形群



065 - 069: 人型が何かを肩に担ぐ字形群



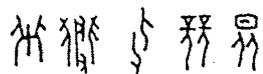
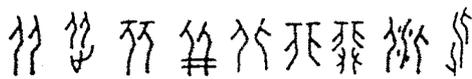
070 - 072: 人型と手を組み合わせた字形群



073 - 079: 人型に羊の頭部が置かれる字形群



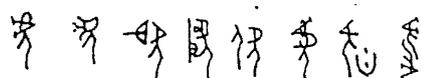
080 - 093: 人型を二つ含む字形群



094 - 096: 人型を三つ含む字形群



114 - 121: 人型に虎ないし虎に類似する頭部が置かれる字形群



などであろう。122 以降は 126-129 のようにところどころ何らかの共通した図形要素を持つものが並ぶところはあるものの、122 と 144 のように類似性を見出しても分けられているものなどがあり、明確にサブグループの区切りを見

出すことは難しい。出現例から判断して、122 以降は類似性を評価するに十分な出現例が集まらなかったため、明確な構造なしに列挙されていると思われる。ここで挙げたサブグループに関しては、サブグループに共通する特徴を数個の字形を挙げるなどして非専門家に示せるであろうし、また、サブグループのための副部首を定義することも可能と思われる。

3.3 字義類似性によると思われるサブグループ

専門家でなければ認識し難いものとしては、030 - 045 の構造がある。単純な字形類似性で考えれば、この区間の見出し字は下図のようにグループ化されるであろう。なぜ 032, 033 と 038, 043 は連続していないか、あるいは、033 と 041, 038 と 042 は連続していないかは理解が困難である。

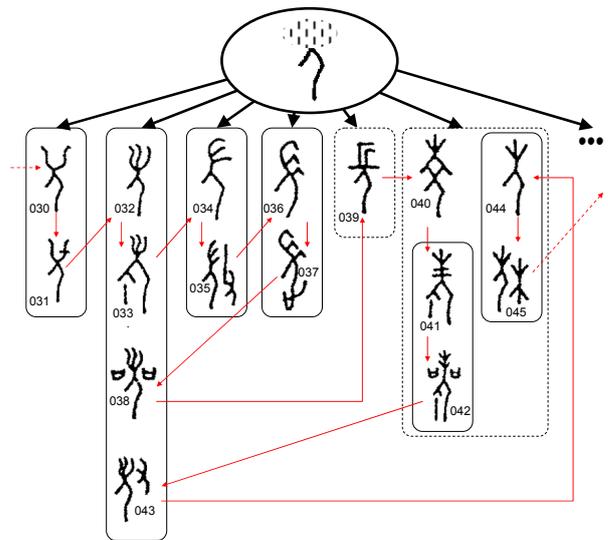


図 11: 人部 030 - 045 のサブグループ構造 (推定)

これに類似した、「字形だけで判断した場合に、最も似た字形の近くに配されていない」例としては、020 が挙げられる。020 は字形の類似だけで考えるならば人部ではなく女部に配すべきものと思われるが、『綜類』はこれを人部に配している。これは、基本的な部首の対立(人部・女部)よりも、腹部の膨らみの有無に関連する字義を優先してグループ化したと解釈できる。032 - 045 の領域に、『甲骨文字集釈』で「老」「長」と積字されている文字があることを考えると、020 と同様に字義を優先してグループ化したのではないかと推測される。

これらのことから、『綜類』は見出し字に対して字義を提案していないのだが、見出し字の配置には著者の字義の解釈が自ずと影響を及ぼしている可能性が考えられる。

4. まとめ、今後の課題

現代漢字や説文小篆への強引な対応づけに起因する甲骨文字研究の混乱の解決として、甲骨文字の字形を直接に扱う整理方式が『綜類』『類纂』といった資料集として提案されたが、分類方式の特異性のため、これらの整理手法は広

く活用されているとは言い難く、そのため非専門家との協力関係も築き難い。これらの分類方式に基づいた研究の蓄積のためには、逆説的ではあるが、これらの部首分類方法に習熟していない非専門家の利便性にも配慮しなければならないのである。

本稿では、階層化された構造を持ち、規則的に絞り込めば、注視して探さねばならないグループの文字数が十分少なくなる検字表が必要であると考え、その構造の検討の第一段階として、まず『綜類』の部首内排列の階層構造を分析した。その結果、「図形の相対配置(部首以外の図形要素が上に付加されるか、下に付加されるかなど)」「図形要素の総数」といった現代漢字的なものではなく、ある種の象形パターンに基づいたサブグループ、密着・偏旁配置といった大まかな字形の構造に基づいたサブグループの排列になっており、さらに前者は出現頻度が高い文字を部分字形として持つ文字のグループであることがわかった。これらから、『綜類』部首内部の階層構造を示すためには「部首よりは複雑だが、数個～十個程度の文字を例示するための文字」(サブグループ見出し字)が有効と考えられる。

しかし、これらのサブグループ自体がどのように排列されているかは不明であり、そのため、また、連続していないサブグループ群が、サブグループ内では共通し、別サブグループにはない特徴を持っているかという問題も明らかでない。本研究の最終的な目標は『綜類』の排列の完全な説明ではなく、非専門家への検字表の提供であるので、これらの問題が全て解決される必要はない。たとえば甲骨文字専門家でも規則性が把握できず、全て記憶に頼るしかない部分もあると思われるが、それらについて、本研究は効率的な記憶方法を提案しようというものではない。

ただし、配される部首が異なっている場合でも引けるような検字表を考えるとすれば、そこでは、サブグループやグループを為さない文字の数は本文の部首内に見られるものよりも増えるであろう。序章で述べたように、ほとんど相関が無い複数の排列基準を組み合わせれば多くのサブグループを作り、同時に絞り込みが容易となる規則的な排列を取ることができるが、『綜類』においては部首内の排列もまた部首に類似した考え方で排列であった。これらと相関性が低いグループ化手法の検討が必要であるが、既存のサブグループ概念との衝突を避けるためには、グループを形成していない、出現例少数字についての検討が最初の課題となるであろう。

謝辞

本研究は、科研費課題 24500116, 26330377 の補助を受けた。

参考文献

- 1) Li Guoying (李國英), Tom Bishop: "Draft Agreement on Old Hanzi Encoding", ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1014 (2003).
- 2) ISO/IEC JTC1/SC2/IRG: "Resolutions of IRG Meeting #38", ISO/IEC JTC1/SC2/IRG N1870 (2012).

- 3) ISO/IEC 10646: Information technology -- Universal Coded Character Set (UCS), International Standard Organization, Switzerland (2012).
- 4) 島邦男: "増訂殷墟卜辭綜類", 1971, 汲古書院
- 5) 姚孝遂: "殷墟甲骨刻辭類纂", 1989, 中華書局, ISBN 9787101004779
- 6) 鈴木敦: "Input to Old Hanzi Expert Group", ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1346 (2007)
- 7) (Japan NB): "Classification of oracle bones based on prior researches on their usages" ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2/IRG N1424 (2008)
- 8) 鈴木敦: "Questions on the policy of old hanzi expert group works" ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2/IRG N1522 (2008)
- 9) 鈴木敦: "対古漢字中の甲骨文字進行符号化処理的問題点", 南方文物, Vol. 67, No. 163, pp.124-129 (2008)
- 10) 鈴木敦: "Old Hanzi における甲骨文字符号化作業の問題点と金文・列国文字符号化作業への影響", 東洋学へのコンピュータ利用第 20 回研究セミナー (2009/03/27)
- 11) 鈴木敦: "論先秦文字符号化問題", 紀念王懿榮發現甲骨文 110 周年國際學術研討會 (2009/08/14)
- 12) 鈴木敦: "先秦文字の符号化に関する諸要件", 中国出土資料学会平成 21 年度大会 (2010/03/13)
- 13) 鈴木敦: "Concerns on Old Hanzi Activities" ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2/IRG N1695 (2010)
- 14) 鈴木敦: "先秦文字の符号化に関する諸要件", 茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集, No. 9, pp.75-84 (2010)
- 15) 鈴木敦: "先秦文字の符号化作業の現状と課題", 情報技術標準 NEWSLETTER, No.89, p.2-5 (2011)
- 16) (Japan NB): "Japan's Proposal of Oracle Bone Coding Framework", ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2/IRG N1771 (2011)
- 17) 鈴木敦、鈴木俊哉: "古漢字国際標準化の 10 年(2003-2012)", 文字研究会第 7 回ワークショップ (2012/12/22)
- 18) 鈴木敦、鈴木俊哉: "甲骨文データベースのデジタル化諸要件と作業プロセスの検討", 東洋学へのコンピュータ利用第 24 回研究セミナー (2012/03/15)
- 19) R. Bayer and E. McCreight. "Organization and Maintenance of Large Ordered Indexes," Acta Informatica, 1, (1972).
- 20) 奥村晴彦: "C 言語による最新アルゴリズム事典", 技術評論社, (1991), ISBN 4-87408-414-1.
- 21) George K. Zipf: "The Psychobiology of Language. Houghton-Mifflin". (1935)
- 22) 沈建華、曹錦炎: "新編甲骨文字形總表", 香港中文大学出版社, (2001), ISBN 9789629960476
- 23) 李宗焜: "甲骨文字編", 中華書局, (2012), ISBN 9787101081343
- 24) 孫海波, 中國社会科学院考古研究所: "甲骨文編", 中華書局, (1965), ISBN 7101005233

附録：『殷墟卜辭綜類』の人部見出し字の分析

● 追加された図形要素の種別について

追加された図形要素は、単体で文字をなすもの(口、手、足など)である場合もあれば、そうでないものもある(点、線など)。前者を「文字の追加要素有」、後者を「非文字の追加要素あり」とする。象形の意図が推測できるが、単体では文字と為さないものも「単体でこれに含める。たとえば「考」「老」における(033など)「杖をついている様子」など)「非文字の追加要素」と扱う。複数の追加要素がある場合、両方とも○が示される場合がある。

● 追加された図形要素の距離について

本表では、一体化した追加の図形要素があるか、偏旁として付加された図形要素があるか、の判断をしている。「文字の追加要素」「非文字の追加要素」と同様、複数の追加要素がある場合、両方とも○が示される場合がある。

● 『甲骨文編』の収録状況について

『甲骨文編』(1965年版)は説文部首が特定できなかったものを附録に収録するという方針を取っているが、説文部首との対応づけに成功し本文に収録した文字との間に常に対応付けの可能・不可能を分ける程に明確な字形差があるわけではない。そのため、『綜類』が一つのサブグループにまとめた文字が、『甲骨文編』の本文と附録の両方に掲出されている場合がある。『綜類』見出し字と『甲骨文編』の掲出字に字形差があるが、『綜類』の掲出例数が少ないため『甲骨文編』が掲出する字形が同じ文字域に入るかどうかの判断が難しい場合は△とした。

● グループ関係の表記について

追加された図形要素が部首部分と一体化している場合は「+」、偏旁として付加されている場合は「&」と表記している。

綜類見出し情報		見出し字形特徴			綜類資料数	『甲骨文編』収録		グループ関係			備考		
部首内番号	見出し字形	部首字の変形	非文字の追加要素有	文字の追加要素有	一体/筆画付加	分離/偏旁付加	資料数10未満	本編&合文	付録	レベル1		レベル2	レベル3
001	ㄣ						多数	○		親字			

002		○			多数	○		同一筆画内変形		
003		○			多数	○	○			
004			○	○	多数	○		親字 +/& α	001+文字	
005		○		○	多数	○				
006			○	○	2					
007		○		○	2					
008		○		○	6	△	○			
009		○		○	8		△			
010		○		○	多数	○	○			
011		○		○	6	△	○			
012		○		○	2		○			
013			○	○	多数	○	△			
014			○	○	多数	○	△		001+文字	
015			○	○	多数	○				
016		○		○	多数		○	001 + α	016 +/ α	
017			○	○	2		○			
018			○	○	2		○			
019			○	○	1		○			

020					3					女 + α	字義優先でここに配列
021		○	○		多数	○	△			001 + α	
022		○	○		多数	○					
023		○	○		6	○					
024		○	○		6	△					
025		○	○		9			○		001 + α	
026		○	○		1						
027		○		○	2					001 & α	
028		○		○	1						
029		○		○	1			○			
030		○		○	多数			○		001 + 頭部	
031			○	○	9			○			
032		○		○	8			△			
033		○		○	8			○			
034		○		○	多数			○			
035			○	○	2			○			
036		○		○	多数			○			
037			○	○	9			○			
親字 + / & α											
										030 + α	
										032 + / & α	
										034 & α	長・老・考の字義を 考慮した混乱が 起きていると推測される
										036 & α	

038			○	○	3		○
039		○		○	2	○	
040		○		○	7		△
041		○		○	5	○	
042			○	○	1		○
043			○	○	多数		○
044		○		○	多数	○	○
045			○	○	2		○
046			△	○	多数		○
047			○	○	2	○	
048		○	○	○	8	○	
049		○		○	4		○
050		○		○	2		○
051		○		○	1		○
052			○	○	1		○
053		○	○	○	1		
054		○		○	7	○	
055			○	○	2		

032 +/& α	長・老・考の字義を 考慮した混乱が 起きていると推測される
041 +/& α	
032 & α	
044 & α	
001 + 頭部	

056		○	○	2	△	△	001 + 頭部
057		○	○	2			
058			○ ○ ○	2			
059		○	○	3		○	
060			○ ○	2		○	
061		○	○	1	○		
062		○	○	多数	○	○	001 & 囲み
063		○ ○ ○ ○	3		○		
064		○ ○ ○	多数	○			
065		○	○	多数	○		親字 +/& α
066			○ ○	5	○		
067		○	○	4	○		
068			○ ○ ○	7	○		
069		○	○	2	○		
070			○ ○	多数	○	△	001 & 手
071			○ ○	9		○	
072			○ ○	2	○		
073			○ ○	多数	○	△	
							001 + 羊

092	𠄎		○	○	○	多数	○				
093	𠄎		○		○	8	○				
094	𠄎		○		○	多数	○				
095	𠄎		○		○	2				○	
096	𠄎	△	△		○	1					△
097	𠄎	○	○	○	○	多数	○				
098	𠄎		○		○	多数	○				
099	𠄎		○		○	9	○				△
100	𠄎		○		○	多数	○				△
101	𠄎		○		○	多数	○				
102	𠄎		○		○	多数	○				
103	𠄎		○		○	5	○				
104	𠄎		○		○	5	○				
105	𠄎		○	○		6	○				
106	𠄎		○		○	6	○				
107	𠄎		○		○	多数	0560 △.0740				
108	𠄎	○	○		○	1					○
109	𠄎		○		○	1					○

001 を 2つ 含む	追従 +/& α	
001 を 3つ 含む		
032 を 2つ 含む		
親 字 +/& α	001 & 背後	
001 & 文字		
001 & 正対		

110			○	○	1		○			
111			○	○	1					
112		△	△	○	5	○	3618 ○.5534		001 & 文字	001 & 正対
113			○	○	多数	○				
114			○	○	多数	0223 △.0619				虎頭
115			○	○	多数		○			
116			○	○	5		○			
117			○	○	2		○			
118			○	○	1		○			
119			○	○	1					
120			○	○	1		○			
121			○	○	6	○				虎頭×2
122			○	○	6	0650 △.1015				
123		△	○	○	4	○				
124			○	○	2	○				
125			○	○	4		○			
126			○	○	4	0860△	4404 ○.5575			
127			○	○	2	○				

親字
+/&
α

001 +
虎頭
or
変異形

孤例
列举

128	𠄎	○	○		1		○
129	𠄏	○	○	○	1		○
130	𠄐	○	○	○	1		○
131	𠄑	○		○	1	○	
132	𠄒		○	○	1	○	
133	𠄓		○	○	1	○	
134	𠄔	○	△	○	1		
135	𠄕		○	○	3	○	
136	𠄖	○		○	2		△
137	𠄗	○		○	4		4727 △,5599
138	𠄘	○	△	○	1	△	
139	𠄙	○	○	○	1		
140	𠄚		○	○	1	△	
141	𠄛	○		○	1	△	
142	𠄜	○	○	○	3		○
143	𠄝	○	○	○	2		○
144	𠄞	○	○	○	2		○
145	𠄟	○	○	○	2		△

親字
+/&
α

孤例
列举

146	𠄎	○	○	○	1	△			
147	𠄎		○	○	1			○	
148	𠄎	○	○	○	1				
149	𠄎		○	○	1				
150	𠄎	○	○	○	1				
151	𠄎		○	○	6			○	

親字
+/&
α

孤例
列举